志村 恵「楽しいツインズライフ」⑪

ふたごの呼び方呼ばれ方

先日、ビネバル出版の山中さんと電話をしていたら、小説などに「ふたご」と出てくれば、それは一人なのか二人なのか尋ねられました。山中さんは村上春樹のある小説を読んでいたのですが、その中で、単に「ふたご」と表記してあったので、ずっと一方だけだと思って読み続けていたら、それが両方を指していたのでちょっと違和感があったというのです。そういえば村上春樹はふたごという素材が大好きで、いろいろな作品でふたごを登場させています。「208」と「209」という番号がついたＴシャツを着たふたごの姉妹が出てくる『羊男のクリスマス』や朝起きたら自分の両脇にふたごの姉妹が寝ていたことで始まる『1973 年のピンボール』などがあります。そして、それらの作品の中で確かに「ふたごは…」と表記していて、それがふたごの両方を意味する箇所がたくさんあるのです。決して「ふたごたちは…」と書いていません。それではっと思って、他の作家の作品も見てみました。小嵐九八郎『黙ったいてもふたごは』。タイトルから「ふたご」で両方を指しています（本文中も）。いしいしんじ『プラネタリウムのふたご』。これも同じです。山田詠美『ペイ・デイ』。「ふたごの兄と妹は…」。男女のふたごだと事情がちがうようです。この探索は大変なので、このあたりでやめておきましょう。＊

ふたごやそれ以上の子どもたちにどのような名前をつけるか、これは大きな問題です。しかし、命名については昔一度書きましたし、多くのガイドブックに出ていますので（たとえば、童童５『ふたご・みつごの良い名前』ビネバル出版）、今回は触れずにおきます。むしろ、今回は名前がついたその後、つまり、どのようにふたごやそれ以上をどう呼ぶかということについて考えてみたいと思います。

実は、僕は職場の大学でハラスメント（セクシャル・ハラスメントやその他のいじめ）関係の委員をしています。研修・啓発担当ということで、相談業務のほかに、いろいろなところで研修会をしております。その中で、特にセクシャル・ハラスメントに関してですが、職場内での呼び方＝呼ばれ方に注意するよう指導しています。つまり、男女の公平な扱いということで、男性職員だけが苗字でたとえば「志村さん」と呼ばれ、女性職員だけが名前でたとえば「恵ちゃん」と呼ばれるような慣習への再考を促すのです。なぜなら、その人がどう呼ばれるのかが、人権の大切な部分を構成しているからです。基本はもちろん「その人が呼ばれたいように呼ぶ」だと思います。しかし、私たちにはそうしてこなかった悲しい歴史があります。むりやりに日本風の名前をつけさせられた日本占領下の朝鮮半島。原音ではなく、日本風漢字読みで呼ばれている中国や韓国の人。「たかだか名前」ではなく、「名前だから」大切なのです。

さて、僕たちふたごは人々からどう呼ばれているのでしょう。『絵の中のぼくの村』によると、小さいとき田島征彦・田島征三兄弟は「タシマのふたご」と呼ばれていたそうです。僕たち自身は近所では結構有名なふたごだったので、「メグマコ」という名前での表記のほかは、単に学年をつけて、たとえば「5年のふたご」などと呼ばれていた記憶があります。中学・高校は「志村兄弟」と呼ばれていました。「志村のふたご」は聞いたことがありません。また、「志村ツインズ」も時代のせいもありますが、全く経験がありません。現在でも、雑誌やテレビを除いたら、実生活で「○○ツインズ」と呼ばれることはあまりないのではと思います。

そうするとやはり、多くの同性ふたごは「△△兄弟」「□□姉妹」と呼ばれているのではないでしょうか？　「宗兄弟」や「荻原兄弟」はこのケースです。場合によっては、「△△ブラザーズ」「□□シスターズ」と呼ばれるペアーも、稀かもしれませんがあるでしょう。実際、僕たちは「Ｔシスターズ」と呼ば

れていたふたご姉妹を知っています。「ブラザース」「シスターズ」、そして「ツインズ」は、上下の隔てがない呼称なので公平でよいのですが、なにせ英語ですから収まりがよくありません。といって、「兄弟・姉妹」だと、どうしても兄姉・弟妹の区別が字に出てしまいます。そして、男女のふたごの場合はもうお手上げです。男女なのに「兄弟」というのはいかにも不公平です。残念ながら、耳に快い、そしてふたごに公平な日本語らしい呼称は、今のところないと言わざるを得ません。

次に、呼びかける場合です。最近では分け隔てしないという親の姿勢が基本にありますから、どちらかを「お兄ちゃん」、あるいは「お姉ちゃん」と呼ぶことはほとんどないと思います。ですから、名前を呼ぶことになると思います。しかし、これがやっかいです。言い間違えるからです。だいたい、子どもの名前は記憶領域の同じところにしまってあるわけですから、咄嗟のとき、言い間違えるのは当たり前です。僕も二つ違いの娘たちの名前をしょっちゅう間違えますから、ふたごとなるとそれはそれは大変でしょう。たとえ、顔があまり似ていないふたごであっても、仕種や物腰はそっくりだったりします。これは男女のふたごでもそうだと思います。ということで、あまりに言い間違えるので僕たちの母は一計を案じました。母は、僕たちの名前を言い間違えないように、一度に両方呼ぶ作戦を編み出したのです。僕一人を呼ぶときも「メグマコ！」、相棒一人を呼ぶときも「メグマコ！」、二人一緒に呼ぶときも「メグマコ！」という具合です。不満に思ったのかあるとき、「どうしてちゃんと一人ずつ呼ばないの？」と聞いてみました。すると、「間違うといけないからよ。だって、両方呼べば必ず当たるでしょう。だからいいのよ」と明るく元気に言われてしまったのですが、妙に納得した記憶があります。母のこのやり方は随分いい加減な話ですが、自分も中年になって記憶力の減退と咄嗟の反応の鈍化を毎日痛感してきて、母のこの知恵は面白いなあと感心しています。ただし問題は残ります。言いやすい口調のせいか、母はいつも「メグマコ」と呼び、「マコメグ」とは言いませんでした。相棒にしてはちょっと不公平に思ったかもしれません。時々入れ替えた方がよかったのかもしれません。

じゃあ、ふたごをどう呼んだらよいのでしょうか?　結局、間違えながらもそれぞれのお子さんの名前を一生懸命呼ぶというのがよいのではないでしょうか？　そして、「お母さん／お父さん、また言い間違えた」と突っ込まれながら、「そうね。また、間違えちゃった」とみんなで大笑いすればよいのです。子どもだって、たまに「お母さん！」と「お父さん！」を間違ったりしますから、それはそれでおアイコですよ。

＊「一人称小説」の場合は、主人公の視点で物語が書かれます。したがって、ふたごの一人が主人公である場合には、この現象はなさそうです。ふたご以外の人物が主人公の場合、そしてさらに、「三人称小説」（語り手が別にいて、いわば客観的な感じで描いていく手法）の場合、「ふたごは…」と書いて二人とも指すことが多いようです。

『ツインズぷらす』第 17 号（多胎育児サポートネットワーク）から転載・修正